

自己と他者は分けられない

—— 『共感脳』を読んで見えてきたこと ——

竹中 信介

目次

1. はじめに
2. 本書の構成と内容の概略
3. 自己と他者をつなぐもの—「共感脳」とは何か—
4. 自己と他者の境界のあいまいさ—哲学から科学への架橋—
5. おわりに

1. はじめに

本書を通読して抱いた感想は、自己と他者は、「脳」を介して、これほどまでに深くつながり、影響し合っているのか、という驚きであった。

評者は、「近代文明」から「現代文明」への転換の時代において起こりつつある、価値観や世界観、人間観の転換についての考察を、専らの研究課題としているが、特に「人間本性理解の転換」という点について、本書から学ぶものは非常に大きかった。近代文明の社会においては、「個人主義」という基本的な価値観が確立され、人は「他者から独立して、一人で生きることができる」と信じるようになった。しかしながら、事實は、本当にそうなのだろうか。評者は、これまでみずからの経験を基に実感的には、「そうではない」と考えてきた。今回、そのような「経験」や「実感」について、本書から「科学的な」根拠が得られたと思う。

本書評では、そのような「自己と他者は分けられない」という視点から、適宜、評者のコメントを交えつつ、本書の研究成果を紹介していきたい。

2. 本書の構成と内容の概略

まず、内容の具体的な検討に入る前に、本書（クリスチャン・キーザーズ『共感脳—ミラーニューロンの発見と人間本性理解の転換』、立木教夫・望月文明訳、麗澤大学出版会、2016年）の構成と内容の概略を確認しておきたい。章立ては以下のとおり、「序章」と

「第1～11章」、「エピローグ」から成る。

- 序章 人びとをつなぐ
- 第1章 ミラーニューロンの発見
- 第2章 直観の威力
- 第3章 人間のミラーリング
- 第4章 生まれながらの社会性
- 第5章 言語
- 第6章 感情を共有する
- 第7章 感覚
- 第8章 共有の学習
- 第9章 自閉症と誤解
- 第10章 社会認知の統一理論
- 第11章 共感倫理とサイコパス
- エピローグ ミラーニューロンは善か悪か

訳者の一人である立木教夫氏による「訳者あとがき」(259頁)で示された見解によれば、本書は大きく3部に括ることができる。

まず、第1部(第1～5章)で、「ミラーニューロン」に関する議論が展開される。ここでは、「視覚」だけでなく、「聴覚」を経由した情報入力に対して「ミラーニューロン」が作動することが示される。また、「運動システム」と言語の起源の連関についての議論も展開される。評者は、これらの章をコミュニケーション論あるいは、言語学との関連でも読むことが可能であると考え、そのような視点から非常に興味深く読んだ。

次に、第2部(第6～9章)では、「運動システム」だけでなく、「感情」や「感覚」のシステムにおいても「共有」が成立しているという発見が踏まえられ、「シェアードサーキット」という概念が導入されることになる。また、シェアードサーキットと「学習」の発達論的な議論がなされる。さらに、「自閉症」に関連して、シェアードサーキットの活性化による治療法が提案される。その意味で、科学的研究が、人間社会における実際の問題へ応用されていると言えるが、評者はこの点に本書の社会的な貢献を見出したい。

最後に、第3部(第10～11章)では、「社会」と「倫理道德」の水準にシェアードサーキットがどのように関わっているのかという問題や、倫理道德とサイコパス、サイコパスの進化倫理的な考察といった主題が扱われている。評者が最も興味深く読んだのは、この最終部であるが、「社会」や「倫理道德」といった、人文科学・社会科学の分野でも扱われている問題との接続を考えるうえで、大いに刺激を受けた。

3. 自己と他者をつなぐもの—「共感脳」とは何か—

まず、次の引用から、本書の基本的な立場を確認しておきたい。

「共感は、私たちの脳の構造に深く刻み込まれています。他者に起こった出来事は、私たちの脳のほとんどすべての領域に影響を与えます。私たちは共感的であるように、また他者とつながるようにデザインされているのです。私たちを共感的にさせる脳の原理を解明することにより、またその華麗な単純さを明らかにすることにより、私たちが真に人間たらしめているものの発見に伴う畏敬と脅威を読者の皆さんと共有していきたいと思っています。」(12頁)

本書の冒頭部分には、このように記されており、全体の展望を伺い知ることができる。第1文「共感は、私たちの脳の構造に深く刻み込まれています」を、本書の根本的な主張として捉えて良いだろう。さらに、「私たちは共感的であるように、また他者とつながるようにデザインされている」という記述は興味深い。何故そのようにデザインされているのか、何によってデザインされているのか、好奇心を刺激される。

また、「私たちが真に人間たらしめているものの発見に伴う畏敬と脅威」という表現から分かるように、著者は、人をして「真に人間たらしめている」人間本性というものを探求する。そして、その発見に伴う「畏敬と脅威」を読者と共有しようとしている。ここから感じ取ることができるのは、科学者としての気概のある姿勢と、人間としての謙虚な姿勢である。評者が、本書全体を読んで感じたのも、そのような著者のバランス感覚である。

以下、そのような視点を念頭に、「共感脳 (empathic brain)」の特色を、「自己と他者をつなぐもの」という切り口から捉えていきたい。

まず、本書全体を通じての鍵概念である「ミラーニューロン」について、単純かつ明快に説明されている箇所があるため、その部分を紹介したい。それによって、「共感脳」の意味と、自己と他者の社会的な「つながり」のメカニズムを捉えることができると思う¹⁾。

「ミラーニューロンは、私たちの周りにいる人びとの行動や感情を、まるでその人たちが私たちの一部になったかのように『再現する』(mirror) のです。そのような細胞の存在を知ること、人間行動の謎の多くが説明可能となりました。」(11頁)

ここでは、自己と他者の「つながり」に関連して、「周りにいる人びと」(他者)の「行

1) この点に関連して、科学史・科学哲学が専門の伊東俊太郎氏は、比較的早い段階から「ミラーニューロン」の発見と、自己と他者の関係性の問題に注目している。詳しくは、『変容の時代—科学・自然・倫理・公共』(麗澤大学出版会、2013年)所収の「第三章 道徳の起源」(69-89頁)を参照されたい。

動」や「感情」が、まるで「私たち」(自己)の一部になったかのように「再現」される、と説明されていることが分かる。この後、具体的な例が挙げられているため、その部分を引用したい。

「例えば、ダイエット中に、あなたが食べてはいけないものを周りの人たちが食べているのを見たら、なぜつらくなるのでしょうか。ミラーニューロンが答えを出してくれます。あなたがチョコレートを手にとって食べるとき、脳細胞のあるネットワーク(これを『チョコレートを食べるネットワーク』と呼ぶことにしましょう)が活性化します。これらの細胞のいくつかは特別な細胞です。それらの特別な細胞は、あなたがチョコレートを食べるときだけでなく、他者がチョコレートを食べるのを見たときにも活性化します。これがミラーニューロンなのです。」(11頁)

これは身近な例であるため、ミラーニューロンとは何かを理解するうえで、有益であると言える。ダイエットの話題に限らず、読者の多くがこれと似たような経験を持たれているのではないだろうか。

例えば、「自分」と「友人」5名、計6名が洋食レストランで食事する場面を想定してみよう。他の5名が皆、ハンバーグ定食を注文しているなか、自分ひとりだけ、ハヤシライス注文し、やがて料理が運ばれてきて、食事が始まったとする。そうすると、同じメニュー(ハンバーグ定食)を注文した友人5名は、「ハヤシライスも美味しそうですね」と自分(あるいはハヤシライス)に注目する。この時の5名の脳内では、まさにミラーニューロンが働いていると言えるのではないだろうか。

そこで、さらにこの場面で考察すると興味深いのは、「自分」の脳内では何が起きているのか、という疑問である。つまり、ハヤシライス注文した「自分」は「友人」5名が食事をするのを見て、「ハンバーグ定食も美味しそうですね」と「共感」するかどうか、である。おそらく、他の5名が自分に感じるほどには、自分は他の5名にそのような「共感」を抱きにくいのではないかと思う。むしろ、自分だけが他の人には無いもの(ハヤシライス)を持っている、という自己の内部での「満足感」が強いのではないだろうか。

いま紹介した例には、「隣の芝生は青い」という諺が当てはまるのではないかと考える。この諺は、他者の所有するものは、自分のものよりも良く見えるという意味である。現在、こういった諺のメカニズムが、科学的な研究によって明らかにできるようになってきていると見て良いだろう。

今回例として考えたのは、ごく小さな友人の集団の例であるが、関係性を拡張して、例えば企業や国家間を事例に考えると、どのようなことが考えられるだろうか。引き続き、読者諸氏も、各自様々に思考を巡らせていただければと思う。

さて、ここまででは自己と他者の「つながり」(接続)に焦点を当てて考えてきたが、逆に自己と他者の「非接続」つまり「切断」という事態も、現代社会ではより深刻である。そこで、本書で取り上げられているのは、自閉症患者の治療法にミラーニューロンあるい

はシェアードサーキットの活性化を応用しようとする試みや、気にすることなく殺人を犯してしまう「サイコパス」の問題である。

よって本書では、「自己」と「他者」をめぐる「接」の契機と、「離」の契機の両方が取り上げられていることが分かる。自己と他者の「離接的關係」を、「共感脳」という視点から多角的に捉えようとするのが、本書の特色と言えるだろう。評者はこの点に、著者のバランス感覚あるいは、人間存在の全体性を意識する姿勢を見る気がするのだが、いかがであろうか。

4. 自己と他者の境界のあいまいさ—哲学から科学への架橋—

ここで考えてみたいのは、日常の感覚で捉えている「自己」が、われわれが思っているほど自己の内部で完結しているものなのかどうか、という問題である。言い方を変えれば、やはり外部の「他者」の影響のもと、自己が成立しているのではないか、という見通しである。つまり、以下の議論では、「自己と他者の境界のあいまいさ」を検討しようと考えている。

古来、「自己と他者」、あるいは「主観と客観」に区分する図式は、哲学上の認識論における主要な関心事であった。近代哲学において、主客の分離、つまり二項対立図式が重視されたのは、周知の事実であろう。特に「自己」あるいは「主観」が、大きな力を持ったのであるが、よく知られるのは、デカルト (René Descartes, 1596–1650) の「われ思う、故にわれあり」という言葉であろう。評者は、その系譜上に、本書評の冒頭でも指摘した近代文明を特徴づける「個人主義」という傾向を位置付けられるのではないかと見ている。

一方、19世紀後半から20世紀初頭にかけて発展し20世紀の思想界を牽引した「現象学 (phenomenology)²⁾」を契機に、そのような主客分離の二項対立図式に対して疑義が提示されるようになったのは、周知の事実であろう。例えば、「相互主観」や「共同主観」といった概念が創出され、「自己」と「他者」の間の相互性や共同性が問題とされるようになったのである。その影響が強く、それ以後の20世紀から21世紀にかけての哲学や社会学は、「自己」ではなく、積極的に「他者」を問題にしてきたと言える。

そこに、本書の議論への接続点が見えてくるわけだが、評者が考えようとするのは、自己と他者の「共同性」という哲学的な問題から、「共感脳」の科学的研究への架橋である。特に、自己と他者の「共同」という概念を、本書でも言及される「個人間の境界のあいまいさ」という概念に接続、あるいは転換して議論してみたい。

その観点から本書で指摘されるのは、例えば以下のようなことである。

2) ここでは特に、ドイツの哲学者フッサール (Edmund Husserl, 1859–1938) が創始した哲学を念頭に置いている。

「シェアードサーキットが発見されるまでは、私たちの脳の見方は、本質的に個人主義的なものでした。周囲の人を含んだ『外の世界』は、脳の感覚野で表象されていました。そして『自己』とその自由意志は、それとは厳格に分離された脳の領域に、位置付けられていました。後者の『個人的な』脳領域は、数多くの選択肢の中で、個人が信じるべき、あるいは行動するべきものは何か、注意するべきものは何か、記憶すべき、想起すべきものは何かを決めるなどの、個人的な機能を扱っていました。もちろん、周りの世界もこの個人的な脳領域に影響を与えるのですが、その影響は間接的なものにとどまり、個人的な力からは区別されていました。社会にも、また脳内にも、個人は明確な境界を持っていたのです。」(121頁)

ここまでの従来的な、いわば「個人完結型」の脳科学の研究成果についての概観である。個人と個人、個人と社会を明確に区別して研究がなされていたことが分かる。それが、新しい科学では、どのように変容することになったのか。それが、以下の記述である。

「新たな研究によって、周囲の人々は単なる『外の世界』の一部であったり、脳の感覚野に縛り付けられているわけではないことが明らかになりました。シェアードサーキットを通じて、周囲の人々や、その人たちの行動や感情は、これまで個人のアイデンティティの安全な避難場所とされてきた運動システムや感覚といった、多くの脳領域に浸透しているのです。個人間の境界は透過的になり、社会の世界と個人の世界も混じり合っています。感情も動作も伝染性です。シェアードサーキットの目に見えない糸が人の心をつなぎ合わせ、個人を越えて広がる有機的なシステムの織物をつくっているのです。」(122頁)

自己と他者は分けられない。これが、最新の脳科学研究によって明らかになった事実である。いわば「個人完結型」の脳科学から、「他者連関型」の脳科学への進化、と捉えることができる。

これまで経験的に、あるいは哲学的に知られていた、自己と他者の「つながり」は、「間接的」なものであった。しかし、著者は「何百年も前から、他者の動作や感情が私たち自身の行動や感情に影響を与えることは知られていました。誤解していたのは、私たちが、どのくらい直接的につながっているかに関する知見でした。」(122頁)と述べ、その「つながり」が、「直接的」であることを強調している。

著者によれば、「脳」は「人間を高い社会性と共感性を持った動物へと変化させるようにできている」(122頁)という。これが、「共感脳」の特色であり、自己と他者の境界は、驚くほど、あいまいであることが明らかになっているのだ。

5. おわりに

われわれ人間存在は、様々な「つながり」の中で生存している。大きく分けて「自然」とのつながり、「他者」あるいは「社会」とのつながり、「神仏」や「超越的なもの」とのつながりが考えられる。この中から、本書評では、特に「自己と他者のつながり」という視点から、本書の内容を検討してきた。

その理由は、本書の「共感」という概念において、その対象として意識されているものが、基本的に「他者」という人間存在であると考えたからである。そこで、今後はそのような「他者」という人間存在の枠を超え出て、次のようなことを考えられるのかどうか、問題提起しておきたい。

つまり、人間から「自然」、あるいは「神仏」への共感、という問題である。本書でも自動車や木といった無機物や植物と、人間の脳の関係性について言及された箇所がある(126-130頁)が、さらに評者が考えてみたいのは、以下のような事例である。

例えば、森林において、木々が伐採される光景を見ると、人間の「脳」はどのように反応するのだろうか。「木々」を擬人化して、あたかも自分の身体が切られたかのようにミラーニューロンが働くのだろうか。もしそうだとすれば、そういった現場を「見る」ことは、地球環境つまり「自然」の保護に一役買うことになるのかどうか。

さらに、「神仏」への共感といった問題は、本書では取り扱われていない。これについては、人格神を想定するのか、自然神を想定するのかによってアプローチの道筋も結果も変わるであろうが、いずれにしても、その時に人間の「共感脳」は働くのかどうか。評者の関心はそこにある。

また、いま述べたのとは逆方向のベクトル、つまり「自然」や「神仏」の側からの「人間」への「共感」については、科学的に研究することができるのだろうか。

上記のような事例を問題提起として、本書評の筆を置きたい。

